

7/14 Tue.

第660回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.660 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor

チェロ
Cello

第1コンサートマスター
First Concertmaster

ジークフリート・マトウス
SIEGFRIED MATTHUS

ショスタコーヴィチ
SHOSTAKOVICH

[休憩]
[Intermission]

ルディ・シュテファン
RUDI STEPHAN

R. シュトラウス
R. STRAUSS

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

ダニエル・ミュラー=シュott -p.6
DANIEL MÜLLER-SCHOTT

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

怒り狂う女 (日本初演) [約10分] -p.8
Furien-Furioso (Japan Premiere)

チェロ協奏曲 第1番 変木長調 作品107 [約30分] -p.9
Cello Concerto No. 1 in E flat major, op. 107
I. Allegretto
II. Moderato – III. Cadenza – IV. Allegro con moto

交響的楽章 (1910年) (日本初演) [約25分] -p.10
Symphonischer Satz für Orchester (1910) (Japan Premiere)

交響詩《死と変容》 作品24 [約23分] -p.11
Tod und Verklärung, op. 24

7/19 Sun.

第151回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 151 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

7/21 Tue.

第694回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No. 694 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor

トランペット
Trumpet

第1コンサートマスター
First Concertmaster

ヘンツェ
HENZE

ベーメ
BÖHME

[休憩]
[Intermission]

R. シュトラウス
R. STRAUSS

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

マティアス・ヘフス -p.6
MATTHIAS HÖFS

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

夢見るセバスティアン (日本初演) [約15分] -p.12
Sebastian im Traum (Japan Premiere)

トランペット協奏曲 ヘ短調 作品18
(マティアス・ヘフス編) [約17分] -p.13
Trumpet Concerto in F minor, op. 18
(arrangement/orchestration: Matthias Höfs)
I. Allegro moderato
II. Adagio religioso – Allegretto
III. Rondo : Allegro scherzando

アルプス交響曲 作品64 [約47分] -p.14
Eine Alpensinfonie, op. 64

夜一日の出ー登り道ー森への立ち入りー
小川に沿って歩くー滝ー幻影ー花咲く牧場ー山の牧場ー
林で道に迷うー氷河ー危険な瞬間ー頂上にてー幻ー
霧が立ちのぼるー日はしだいにかげるー哀歌ー
嵐の前の静けさー雷雨と嵐、下山ー日没ー終結ー夜

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社
※本公演では日本テレビの収録が行われます。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：横浜みなとみらいホール (7/19)

7/25 Sat.

第289回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.289 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

7/26 Sun.

第289回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.289 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Conductor

ピアノ
Piano

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

シューマン
SCHUMANN

ベートーヴェン
BEETHOVEN

[休憩]
[Intermission]

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5
SEBASTIAN WEIGLE

阪田知樹 -p.7
TOMOKI SAKATA

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

歌劇〈ゲノフェーファ〉序曲 [約8分] -p.17
"Genoveva" Overture

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73〈皇帝〉
[約38分] -p.18

Piano Concerto No. 5 in E flat major, op. 73 "Emperor"
I. Allegro
II. Adagio un poco mosso - III. Rondo: Allegro

交響曲 第4番 イ長調 作品90〈イタリア〉
[約27分] -p.19

Symphony No. 4 in A major, op. 90 "Italian"
I. Allegro vivace
II. Andante con moto
III. Con moto moderato
IV. Saltarello: Presto

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ
(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

名匠ヴァイグレが
珠玉の名作に
熱い思いを込める！



©読響

7月は常任指揮者ヴァイグレが3プログラム・5公演を指揮。R. シュトラウス〈死と変容〉〈アルプス交響曲〉、メンデルスゾーン〈イタリア〉など、得意のドイツ音楽を中心に聴き応え抜群の重厚なプログラムに挑む。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年には、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴び、04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務めた。08年から23年夏までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務め、在任期間中には同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に度々輝くなど、その手腕は高く評価された。

読響には16年8月に初登場し、19年に第10代常任指揮者就任。24年には読響の欧州ツアーを成功に導き、25年3月には読響と〈ヴォツェック〉を披露し絶賛された。近年もメトロポリタン歌劇場で〈ボリス・ゴドゥノフ〉、ウィーン国立歌劇場で〈サロメ〉、バイエルン国立歌劇場で〈影のない女〉〈パルジファル〉を指揮するなど国際的な活躍を続ける。23年7月には、フランクフルト歌劇場の音楽総監督としての最後の公演でルディ・シュテファン〈最初の人類〉を振り、大きな話題を呼んだ。これまでにバイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭のほか、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。昨年3月にはベルリン・フィルにデビューしたほか、バイエルン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団と共演を重ねている。

7/14
定期

7/19
横浜マチネー

7/21
名曲

7/25
土曜マチネー

7/26
日曜マチネー

Maestro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
文化庁
独立行政法人日本芸術文化振興会

7/14
定期

Artist



©Uwe Arens

チェロ

**ダニエル・
ミュラー＝シュット**

DANIEL MÜLLER-SCHOTT, Cello

豊かな表現力と驚異的なテクニックで人気を博す世界的チェリスト。1976年ドイツのミュンヘン生まれ。H. シフ、S. イッサーリスらに師事。若くして頭角を現し、これまでにベルリン・フィル、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ニューヨーク・フィル、ボストン響、クリーヴランド管、シカゴ響など世界の名門楽団と共演。近年はA. パッパノー指揮、ロンドン響と共演したほか、カーネギーホールで演奏するなど活躍を続ける。バロックから現代までの幅広いレパートリーに加え、自身による編曲や現代作曲家とのコラボレーションなど、チェロのレパートリーの拡充にも取り組む。使用楽器は1727年マッテオ・ゴフリラー作「エクス・シャピロ」。読響には2015年の初共演に続き2度目の登場。



©Ayustet

ピアノ

阪田知樹

TOMOKI SAKATA, Piano

2021年エリザベート王妃国際音楽コンクール第4位入賞。奥深い音楽知識を持ち国際的に活躍する気鋭ピアニスト。東京芸術大学を経て、ハノーファー音楽演劇大学大学院ソリスト課程を修了。ヴァン・クライバーン国際コンクールに19歳で最年少入賞したほか、クリーヴランド国際コンクール特別賞など受賞多数。15年CDデビュー、20年には世界初録音を含む意欲的な編曲作品のアルバムをリリース。横浜文化賞文化・芸術奨励賞、出光音楽賞、神奈川文化賞未来賞、ベストデビュータンクト賞、ホテルオークラ音楽賞、ミュージック・ペンクラブ音楽賞を受賞。今年はデビュー15周年、フランツ・リスト国際コンクール優勝から10年という節目の年を迎え、多岐にわたる活動を展開する。読響とは19年の初共演以降、多数共演している。

7/25
土曜マチネー

7/26
日曜マチネー

Artist

7/19
横浜マチネー

7/21
名曲

Artist

世界最高峰のトランペット奏者。18歳でハンブルク州立歌劇場の首席奏者に就任して話題を呼び、以後16年間同歌劇場に在籍し数々の音楽賞を受賞。1985年からはドイツの金管アンサンブルのパイオニア的存在である「ジャーマン・ブラス」のメンバーとして活躍し、2016年には同団体がドイツで最も権威あるエコー・クラシック賞を受賞した。世界各国からソリストとして招かれており、ヘフスのために作曲された作品も多い。編曲者としての手腕も高く評価されており、これまでにリリースされたCDには自ら編曲した曲も数多く収録されている。2000年にはハンブルク音楽大学教授に就任。客員教授として各国の音楽大学に招聘されるなど、後進の指導にも力を入れている。読響初登場。



©Dörte Ebermann

トランペット

マティアス・ヘフス

MATTHIAS HÖFS, Trumpet

ジークフリート・マトゥス

怒り狂う女 (日本初演)

「カッコ」と聞いて「人間国宝」を思い浮かべる向きは、そうとうの文化通である。国の重要無形文化財保持者として「各個認定」された人物を、通称「人間国宝」という。こうした国家的な御墨付きは、自国文化の保護と発展を促すために、形は違えど世界中で試みられてきた。

ジークフリート・マトゥス (1934～2021) はドイツ民主共和国 (旧東独) で第一級の作曲家として社会主義統一党政権に重用されたのち、最終的にはドイツ連邦共和国 (再統一国家) においても大功労十字章を受章した (指揮の分野でこうした「人間国宝」的な立場にあったのが読響・名誉指揮者だったクルト・マズアである)。2005年、戦後復興と東西統一、ふたつの大事業完遂の象徴ともなった、ドレスデン聖母教会再建献堂式のために典礼音楽を提供したのも、この作曲家だ。

マトゥスは1999年、大管弦楽のための〈Furien-Furioso〉を書いた。「Furien」とはローマ神話の復讐の女神たち「フリアエ」 (ギリシャ神話の「エリニュエス」) を指す。作曲家は「しばしば私たちの人生を困難なものにする、往々にして外見上の愛想のよさや親切心という衣を纏^{まと}って現れる不誠実で狡猾な存在」の代表として「フリアエ」を挙げ、「音楽には魔力が宿るというから (中略) この曲でそんな『フリアエ』の悪霊を追い払おうではないか」と語る。

曲の冒頭、女神の“金切り声”が響く。弦楽の上下動が続き、そこに再度、“金切り声”がかぶさると、やがてティンパニを合図に静けさが到来する。弦楽が何かをうかがうかのように進んだ先で、ヴァイオリンが“ひとり語り”を始める。打、弦、管楽器が楽想を保ったまま合流したのち、“金切り声”が戻る。金管の高らかな吹奏を経て、木管・金管・弦・打の各声部が揉み合うように前進するが、いずれも勢いを失っていく。動きが止まりかけたその瞬間、ティンパニの打撃^{いっせん}一閃で曲を終える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1999年／初演：1999年6月12日、ベルリン／演奏時間：約10分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2 (エスクラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (サスペンデッド・シンバル、タムリン、シロフォン、フレクサトーン、ラチェット)、ハープ、弦五部

ショスタコーヴィチ

チェロ協奏曲 第1番 変ホ長調 作品107

ソ連共産党第一書記のフルシチョフは1956年の第20回党大会で「スターリン批判」をおこなった。最高指導者の死から3年。脱独裁化はこれを機にいっそう進む。

ドミトリ・ショスタコーヴィチ (1906～75) はこの年、50歳の節目を迎えた。同年、レーニン勲章を受章。前年にはヴァイオリン協奏曲第1番の初演も実現した。作曲家がこのヴァイオリン作品を書いたのはおもに1948年、「ジダーノフ批判」 (文化統制) の嵐が吹き荒れたあの年だ。一方、オペラ〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉の再演は叶わない。「音楽ならざる荒唐無稽^{かな}」という死刑宣告は、いまだ有効だった。スターリンの亡霊はなおも劇場をうろつく。

その亡霊も存在感を徐々に薄める。象徴的なのは1958年の党中央委員会決議。48年の批判を取り消した。時を同じくして当局はショスタコーヴィチに最高栄誉、レーニン賞を贈る。創作を縛る鎖は概ね錆^さびた。

こうした環境の下、作曲家は1959年夏、チェロ協奏曲第1番を書き上げる。プロコフィエフ最晩年のチェロと管弦楽のための交響的協奏曲に触発されたという。民謡風の既存曲を引用するその手法を、ショスタコーヴィチはみずからのチェロ協奏曲に取り入れた。

第1楽章 冒頭の動機 (ト・変ヘ・変ハ・変ロ) は映画音楽〈処刑台への行進〉から。これは作曲家の名前を示す音型 (二・変ホ・ハ・ロ) の変形と見ることも。この冒頭動機は楽章を超えて登場する。しばらくすると名前音型の派生形 (ハ・ロ・変ホ・二) が繰り返される。やがてムソルグスキーの〈子守唄〉 (死神が母親から幼子を奪う歌曲) が切々と響く。

第2楽章 チェロ同様、ホルンが独奏的な役割を果たす。

第3楽章 カデンツァ。前楽章の要素や〈処刑台への行進〉の動機を用いる。

第4楽章 行進曲風の楽想を第1楽章と共有。断片が徐々にスターリンの愛唱民謡〈スリコ〉の旋律として結実する。チェロ、ホルン、ティンパニが掛け合いを聴かせる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1959年／初演：1959年10月4日、レニングラード (現サンクトペテルブルク)／演奏時間：約30分
楽器編成／フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2 (コントラファゴット持替)、ホルン、ティンパニ、チェレスタ、弦五部、独奏チェロ

ルディ・シュテファン

交響的楽章 (1910年) (日本初演)

どの分野にも「もし生きていれば一家を成していたに違いない」とその早世を惜まれる人物が存在する。ルディ・シュテファン (1887~1915) は20世紀初めのドイツ楽壇にとってそういう作曲家だった。

ドイツ南西部のヴォルムスに生まれたシュテファンは、21歳でデビュー作となる〈管弦楽のための作品1〉を書き上げた。以後、一連の管弦楽曲の創作を通して作曲家としての地歩を固め、やがて西洋音楽の将来を担う重要な才能と見なされるようになる。フランクフルト歌劇場がオペラ〈最初の人類〉の上演を作曲家に約束したのも、前途有望な若者への期待のあらわれだ。

こうした周囲の^{しよくぼう}囑望の灯とシュテファン自身の意欲の光とを、第一次世界大戦が吹き消してしまう。作曲家は1915年9月29日、兵士として赴いた東部戦線でロシア兵に頭を撃ち抜かれた。享年28。さらに、第二次世界大戦中の連合国軍による空襲で、シュテファンの遺稿の大部分は焼けてしまったので、現存作品はきわめて限られる。

1910年の〈管弦楽のための音楽 (交響的楽章)〉は、作曲家がその評価を高めていく時期の1曲。どこかそっけないタイトルは、時代精神を反映している。たとえば、カンディンスキーの「コンポジション」や、ココ・シャネルの「シャネル N°5」。いずれも、詩的なタイトルではないが、かといって囚人番号然ともしていない。相対化のそぶりを見せながら、その実、孤塁を守る思いがその根底にある。

曲は単一楽章。いくつかの二項対立、すなわち音程に関しては半音と5度、運動性の点では直線的な上行と下行、テンポ感は急速と緩徐、サウンド面では騒々しさと静けさ、編成上では大管弦楽と室内楽といった要素を組み替えながら、さまざまな楽想のブロックを作り、それらを連ねていく。最終的には、オルガンも加わる大音響ののち、静かに消え入りかけるも、突然、明るい光を取り戻し潔く作品を閉じる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1910年／初演：1911年1月16日、ミュンヘン／演奏時間：約25分

楽器編成／フルート3 (ピッコロ持替)、オーボエ、オーボエ・ダモーレ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (太太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、銅鑼)、ハープ、チェレスタ、オルガン、弦五部

R. シュトラウス

交響詩〈死と変容〉 作品24

リヒャルト・シュトラウス (1864~1949) は後年の回想で「新しい思想は新しい形式を求める。リストの交響詩では詩的な想念が、同時に形式を作る要素にもなっている。リストのこの基本原理は、私の創作の道標となった」旨を述べている。

作曲家にとって交響詩の第1創作期 (1886~89年) はまさに、この基本原理に忠実に創作を進める模索期だった。そこでは〈マクベス〉〈ドン・ファン〉と〈死と変容〉を書いたが、作曲家はこれらを三部作と考えていたらしい。そのうち、もっとも観念的なのが〈死と変容〉だ。

シュトラウスをして、この交響詩を観念的たらしめた人物が、アレクサンダー・リッターである。ふたりが出会ったのは80年代半ば。リッターはマイニンゲンの宮廷楽士だった。大のワーグナー／リスト派であったリッターは、30歳以上も年若い楽長シュトラウスに、リストの交響詩観と、哲学者ショーペンハウアーの^{えんせい}厭世主義を植え付ける。〈死と変容〉はその結果と言っても過言ではない。

シュトラウスは実際、1889年にこの交響詩を書いたのち、音楽の内容と呼応する詩の創作をリッターに依頼し、90年の初演のプログラムにそれを掲載した。リッターはその後、詩を改稿、作曲家はその改訂稿を総譜のモットーとした。それは「横たわる病人、死との絶望的な戦い」といった悲観的な内容から、「力強く彼の耳に鳴り響く、世界の救済が、世界の浄化が」といった躍動的な理念へと移っていく。

音楽はハ短調の序奏で始まる。基層は病人の不整脈のような弱々しい鼓動。そこに時折、病前を回想するような柔和な旋律を挟み込む。ティンパニの一撃でにわかに急速部へ。死との戦いを示すかのような楽想、幸福時代を懐かしむ部分を経て、金管群が浄化のテーマを示す。序奏を回想した後、主人公の死を象徴する弱々しい銅鑼。やがて長調世界にすべての楽器が合流していく。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1889年完成／初演：1890年6月21日、アイゼナハ (ドイツ)／演奏時間：約23分

楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (銅鑼)、ハープ2、弦五部

ヘンツェ

夢見るセバスティアン (日本初演)

生誕100年となるドイツの作曲家ハンス・ヴェルナー・ヘンツェ (1926～2012) による管弦楽曲〈夢見るセバスティアン〉は、オーストリアの表現主義詩人ゲオルク・トラークル (1887～1914) が遺した同名の詩に基づく最晩年の仕事である。

背景としてトラークルとヘンツェを結ぶ精神的な絆を挙げておこう。第一にトラークルの故郷であり詩のインスピレーションの源泉であるザルツブルクという街は、ヘンツェにとっても数々のオペラが初演された特別な地であった。ヘンツェ自身、本作がザルツブルクの空気感やバロック的な情緒、夕暮れや月の光と深い関係を持つと語っている。第二に作品に漂う死の気配である。27歳で世を去ったトラークルが生前にまとめた最後のテキストを、当時70代後半を迎えていたヘンツェは静謐な響きに共鳴させている。第三に既成の社会規範から疎外された愛という共通項である。トラークルを苦しめ続けた実妹への禁忌的な執着と、ヘンツェが戦後ドイツの抑圧的な社会の中で公言した同性愛。道徳から疎外された体験が生む罪と無垢が同居した過敏なロマンティシズムは、この作品を読み解く一つの鍵となりうるだろう。

一方で両者には非対称性もある。狂気とドラッグにまみれた若い感性で紡がれたトラークルの言葉を、ヘンツェはベテランらしい自在な筆致で、まるで映画のカメラが対象を追い、あるいは記録者が特定のテーマについての対話を書き留めるかのように音楽化し、極限まで洗練された職人技的な管弦楽法によって、客観的に、しかし誰よりも深い共感を持ってスコアに定着させた。

単一楽章で「異なるキャラクターが次々と来ては去り、現れ、輝き、そして消えていく」というヘンツェの言葉通り、様々な記憶の断片がモザイク状に展開し繊細なテクスチャに融解、薄暮のような音の彩が繰り上げられる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：2003～04年／初演：2005年12月22日、アムステルダム／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート3 (ピッコロ、アルトフルート持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3 (バスクラリネット持替)、ファゴット3 (コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、小太鼓、トムトム、シンバル、サスペンデッド・シンバル、ヴィブラフォン、ウッドブロック、メタルブロック、カスタネット、銅鑼、鐘、クロティル、木魚)、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦五部

ベーメ

トランペット協奏曲 ヘ短調 作品18 (マティアス・ヘフス編)

オスカー・ベーメは1870年、音楽家の父のもとドイツ・ドレスデン近郊の炭鉱街に生まれた。若き日のベーメはトランペットのソリストとして欧州を巡った後、ライプツィヒ音楽院で作曲家としての研鑽を終えた。1897年にはロシア・サンクトペテルブルクの名門マリインスキー劇場管弦楽団のホルネット奏者に就任、ロシア国籍を取得しソリストや指導者として24年以上にわたり同地で華々しく活躍した。しかし、1930年代に吹き荒れたスターリンの「大粛清」により、ドイツ系であるという理由から逮捕され、オレンブルクへ流刑となる。長年その最期は謎に包まれていたが、近年1938年10月3日に銃殺された事実が明らかになった。

本協奏曲は1899年、A管トランペット (またはピストン・ホルネット) のための作品として出版された。ロマン派の時代にはトランペット協奏曲というジャンルが衰退していたので、本作はこの時代にあっては極めてまれなフルサイズのトランペット協奏曲の名作として知られることとなった。A管トランペットの衰退に伴い、20世紀半ばにはB♭管で半音上げて演奏するヘ短調版が定着した。

第1楽章 アレグロ・モデラート 情熱的で哀愁を帯びたオーケストラの前奏に導かれ、独奏がメンデルスゾーンを彷彿とさせる弦楽器のようになめらかでドラマチックな旋律を歌いだす。

第2楽章 アダージョ・レリジョーソ 祈りを捧げるような、厳かで深い美しさを持つ緩徐楽章。繊細なピアノニッシモから豊かなフォルティッシモまでの音色変化と、息の長いレガートのコントロールが聴きどころ。

第3楽章 ロンド アレグロ・スケルツァンド きらびやかで軽快なロンド風のフィナーレ。終盤に向けて華麗なパッセージや急速なアルペッジョ、高音域への跳躍が頻出、独奏者には圧倒的なテクニックと強靱なスタミナが要求される。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：不明／初演：1899年6月9日 (初演場所不明)／演奏時間：約17分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、ティンパニ、打楽器 (シンバル)、ハープ、弦五部、独奏トランペット

R. シュトラウス アルプス交響曲 作品64

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）が1915年に完成させた〈アルプス交響曲〉は、雄大な山脈の踏破を描いた標題音楽である。14歳で経験した登山と激しい嵐の記憶が本作の直接的なインスピレーションとなった。しかしその底流には、近代ヨーロッパの思想的展開に対するシュトラウスの態度が見え隠れする。

スケッチ段階において、本作には「反キリスト者」という仮題が付されていた。19世紀後半の科学技術の発展と伝統的宗教観の動揺は、ヨーロッパに深い精神的危機をもたらした。哲学者ニーチェに代表される知識人たちは、キリスト教道徳そのものが本来のエネルギーを去勢していると批判した。

ニーチェはかつて心酔したワーグナーがキリスト教的な救済に退行したことで決別したが、シュトラウスもまたワーグナーの管弦楽法を継承しながらも、その重苦しい宗教性やゲルマン主義からは距離を置いていた。「登山」は自らの足で大地に立ち人間と自然がダイレクトに繋がる、つまり人間が神の救済に依存せず、己の肉体と精神の力だけで課題を克服するメタファー、神なき近代における人間讃歌と解釈できる。本作の性格を決定づけたもう一つの契機が、同時代を共に歩んだマーラー（1860～1911）の死である。マーラーの宗教観にはキリスト教のみならずユダヤ的なルーツ、汎神論、東洋的な無常観が混ざっていた。その訃報に接したシュトラウスはリアリストとして、今、ここに生きる肉体と自然を肯定する作品を、哀悼の意を込めて描こうとしたのかもしれない。

シュトラウスは1903年の〈家庭交響曲〉を最後に標題管弦楽曲から離れ、〈サロメ〉（1905年）、や〈ばらの騎士〉（1911年）などでオペラ界に君臨していた。その彼が言葉の制約から一時的に自らを解放し、純粋な音の力だけで世界を構築したいという欲求に向き合っており、オペラで培った劇的な構力、緻密な心理描写、究極の管弦楽法で交響詩というジャンルをアップデートしたのが〈アルプス交響曲〉だったのである。

シュトラウスは1913年までベルリン宮廷歌劇場の音楽総監督を務め、その後もこの地を拠点に活動していた。本作のベルリンでの初演時、第一次世界大戦は泥沼化していたが、政治に関心の薄い現実主義者であったシュトラウスにとって、周

囲がナショナリズムに狂っていくなか、「アルプス」はまた純粋な音楽体験への逃避の道だったのかもしれない。

本作は登山から下山までのプロセスを22の標題を持つ場面によって途切れることなく描いている。曲は低弦の不気味な下行音型（「夜」の動機）で幕を開ける。金管の咆哮によって「日の出」が告げられ、旅人は「登り道」を力強く進み始める。遠方（舞台裏）から狩猟のホルンの音が聴こえてくる。

自然の美しさと陰しさが天才的な管弦楽法で描写され、登山者は自然と対峙する。ハープとチェレスタが水の飛沫の散乱を描く「滝」、輝かしい色彩が乱反射する「幻影」、牛の鳴き声やカウベル、アルペンホルンが聴こえ「道に迷」ったり、「氷河」の危険な道を乗り越えたりしていく。「頂上にて」ではトロンボーンが荘厳な主題を奏で、音の奔流が自然の崇高さを描く（「幻」）。

ここから下山が始まる。「霧が立ちのぼる」「日はしだいにかげる」「哀歌」「嵐の前の静けさ」では場面の名前通り、空気は不穏さを孕み始める。静まり返った次の瞬間、ウィンドマシーンやサンダーシートが炸裂し、半音階の暴風雨が吹き荒れる（「雷雨と嵐、下山」）。

嵐を乗り越え麓に着いた時、世界は「日没」の残光に包まれる。パイプオルガンが厳かに響く中、「終結」の温かい和音が自然と闘い抜いた充足感を表現する。「夜」のテーマが再び世界を包み、静寂に吸い込まれるように幕を閉じる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1914～15年（ただし1911年頃からスケッチは始めていた）／初演：1915年10月28日、ベルリン／演奏時間：約47分

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、ヘッケルフォン、クラリネット3（バスクラリネット持替）、エスクラリネット、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン8（ワーグナーチューバ持替）、トランペット4、トロンボーン4、チューバ2、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、銅鑼、カウベル、ウィンドマシーン、サンダーシート、グロッケンシュピール）、ハープ2、チェレスタ、オルガン、バンダ（ホルン9、トランペット2、トロンボーン2）、弦五部

シューマン

歌劇〈ゲノフェーファ〉序曲

7/25
土曜マチネー

7/26
日曜マチネー

Program Notes

ロベルト・シューマン（1810～56）はクララとの結婚を果たすと、次々と各ジャンルのインスピレーションが沸いた。1840年に歌曲、1841年に交響曲、1842～43年に室内楽、1843年にオラトリオに取り組み、そして、悲願だったオペラの創作に向きあったのは、ドレスデン時代の1847～48年である。当地の宮廷歌劇場指揮者だったワーグナーとの接触もあり、シューマンがワーグナーから何らかの影響を受けた可能性は高い。原作にはヘッベルの戯曲『ゲノフェーファ』を選び、詩人のライニックに台本を依頼した。しかしその台本に満足できず、ティークの悲劇『聖女ゲノフェーファの生と死』も参照しつつ、シューマン自身が台本全体をとりまとめた。

オペラのあらすじは次の通り。ゲノフェーファの夫で領主のジークフリートが十字軍遠征に赴く。遠征に際して彼は、信頼する家臣のゴー口に妻を託す。しかし、密かにゲノフェーファに恋心を抱いていたゴー口は、彼女を執拗に口説こうとする。繰り返し拒絶されたゴー口は異界の魔女の助けを借りて復讐を企てる。やがてジークフリートは帰還し、妻の不貞について報告を受け、妻の処刑を命じる。最終的にゴー口の裏切りが暴かれ、夫婦は幸福な再会を果たす。

〈ゲノフェーファ〉序曲は、オペラの台本が完成されていない時点で、最初に作曲された。それにもかかわらず、オペラ本編で使用される主要な動機が複数用いられており、オペラの内容を詩的に凝縮した音楽となっている。序曲冒頭は、ゲノフェーファに失恋して深く傷ついたゴー口の恨みや呪いと関連している。テンポの速い主部に入ると、清らかなゲノフェーファを暗示する動機やジークフリートを暗示するファンファーレの音型が聞こえる。いくつもの苦悩や葛藤を乗り越えたのち、歓喜の大団円をイメージさせて終わる。

〈稲田隆之 音楽学〉

作曲：1847～48年（オペラ全曲）／初演：1850年2月25日、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス（序曲のみ）、1850年6月25日、ライプツィヒ市立劇場（オペラ全曲）／演奏時間：約8分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

7/25

土曜マチネー

7/26

日曜マチネー

Program Notes

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73 〈皇帝〉

1809年、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が最後のピアノ協奏曲となる第5番を完成させる頃、ナポレオン軍がウィーンを包囲した。皇帝や貴族たちはウィーンから去り、それもあって公開初演は2年ほど遅れた。

その第5番の初演で、ベートーヴェンは初めてみずからのピアノ独奏を回避した。1802年頃から遺書を書くほどに聴覚の悪化が始まっており、この初演に際しては、もはやオーケストラとのアンサンブルが難しくなっていたのだろう。なお〈皇帝〉の副題は彼の死後、作品の風格を表すものとして、主に英語圏で定着した。

曲は3つの楽章からなる。

第1楽章は、画期的なピアノ独奏による華麗なカデンツァで始まる。それにオーケストラによる勇壮な主要主題が続く。全体は「第1提示部」「第2提示部」「展開部」「再現部」からなる協奏風ソナタ形式をとりつつ、オーケストラとピアノが主要主題をめぐって、幸福な役割分担のかたちを探し求めるようにして組み立てられている。両者はさまざまなアンサンブルを繰り広げながら、最終的にオーケストラによる勇壮な主要主題と、ピアノによるカデンツァ風のパッセージの掛け合いという答えに至る。最後はそれを祝福するかのように華やかに終わる。

第2楽章は、口長調というぐもった響きの調により、弦楽器が弱音を付けながら演奏する。全体にセピア色をイメージさせる響きのなか、ロマンティックな旋律が変奏されていく。

切れ目なく演奏される**第3楽章**は、8分の6拍子の跳ねるようなリズムを基調としている。ピアノは冒頭のロンド主題を担い、音楽展開の主導権を握る。やがてオーケストラは「ターンタタ・タンタンタン」の新しいリズムを取り入れることで、ピアノと新たな対話を繰り広げる。

〈稲田隆之 音楽学〉

作曲：1808～09年／初演：1811年1月13日、ウィーン、ロブコヴィツ侯爵邸（非公開）、1811年11月28日、ライプツィヒ（公開）／演奏時間：約38分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

メンデルスゾーン

交響曲 第4番 イ長調 作品90 〈イタリア〉

フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）は、1830年10月に訪れたイタリアに心底魅了された。青い空に燦々^{さんさん}と輝く太陽や澄んだ空気を満喫するなかで、作品のイメージが膨らみ、交響曲第4番〈イタリア〉の作曲に向かう。まずは、「明るく^{はつらつ}とした長調の第1楽章」と「イタリアの民俗舞踊『サルタレッロ』による激しい短調の第4楽章」、という極めて珍しい構想が生まれた。その一方、第2楽章と第3楽章の構想は難航し、一旦この交響曲の作曲を中断する。

彼が再び〈イタリア〉交響曲に向かうのは、1833年1月、すでにベルリンに帰郷した後のことである。前年11月にロンドンのフィルハーモニー協会から新作の委嘱を受け、〈イタリア〉交響曲の本格的な作曲に取りかかった。1833年5月13日、ロンドンで、自ら〈イタリア〉交響曲の初演を指揮し、大成功を収めている。ただしこのときこの交響曲には「イタリア」の副題はなく、イタリアとの関連も公にされなかった。また、彼自身がこの作品に改訂の意思を持ち続けたため、楽譜は彼の生前には出版されていない。つまり〈イタリア〉交響曲は、メンデルスゾーンにとっては不本意なかたちで現在まで親しまれてきたことになる。しかし裏を返せば、インスピレーションのほとばしりから生まれた若々しく瑞々しい響きは、この交響曲の魅力となっている。全曲は古典的な4楽章構成をとる。

第1楽章 快活で明るい楽章だが、中間で弦楽器群がフガートを形成し、厳粛な雰囲気も生まれる。

第2楽章 修道士の行進を模したような、仄暗く^{ほのぐら}擬古的な旋律による部分と、長調で牧歌的な旋律による部分が交替する。

第3楽章 優雅なメロディーによる伝統的なメヌエット。中間部で聞こえるホルンの響きがドイツの森を想起させる。

第4楽章 サルタレッロ。激しくリズムを刻む舞曲で、イタリアの情熱を感じさせる異色のフィナーレである。

〈稲田隆之 音楽学〉

作曲：1830～31、33年、34年改訂／初演：1833年5月13日、ロンドン／演奏時間：約27分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

7/25

土曜マチネー

7/26

日曜マチネー

Program Notes